



No. 99 2010. 7

(株) よかネット

もくじ

NETWORK

中山間地域活性化についての私見
 - 富士町情報化ビレッジ形成プロジェクトの中で考えたこと - 2

過疎集落の安心・安定の暮らしを維持して行くには何をして
 いけばよいのか? - 八女市上陽町上横山地区をモデルに考える - 5

第 18 回よかネットパーティー報告 8

津屋崎の市民参加によるまちづくりの取り組み
 - JSURP福岡支部 第 2 回まちづくり研究会報告 - 9

地域ゼミ エコ市民団体「耳納ねっと!」
 - 眠っているもの、リフォームしてみませんか? - 10

皆様から寄せられた「よかネット」へのご意見、近況などの紹介 12

オチコボレ論

オチコボレの戯言・その7
 落ちこぼれ時代における、オチコボレ人間不足が、 14
 日本の落ちこぼれからの脱出を妨げている

見・聞・食

九州最南端の南大隅町の地域資源を活用した雇用創出プロジェクト
 シンポジウム報告「みんなでどう売る、どう作る!」 18

近況

奈良の纏向遺跡へいく 20

3 年間で 62 人の UI ターン者 正応寺地区の地域・むらづくり 21

広島県で「ひろしま夢プラザ」を見学し、呉冷麺を食する 22

MAZDA Zoom-Zoom スタジアム広島に遠征に行きました 23

八女市上陽町 地域ブランド焼酎づくり 動き出す 24

books

本を片手に温泉へ 25

お知らせ

新人紹介 25

よかネットホームページリニューアル 26

●第 18 回よかネットパーティー
 今年もいい出会いがありました

- ①糸島ジャムの試食・即売会の様子
- ②大牟田のうみたけを明太子であえた「辛みなと漬」
- ③お酒を片手に交流中
- ④今年も好評だった「博多にわか」
- ⑤東京で人気? 丸々 1 本ネギが入った「ねぎばん」
- ⑥珍しい形のコンロで出来たてを味わいました

写真①	写真②	写真③
写真④	写真コメント	写真⑤
写真⑥		

中山間地の活性化についての私見 —富士町情報化ビレッジ形成プロジェクトの中で考えたこと—

原 啓介

前号でも書いた佐賀県委託事業「情報化ビレッジ形成プロジェクト」で富士町に入り出して8カ月が経った。この事業の目的は「地域情報化を通じて、富士町の暮らしの豊かさを向上する」ことである。そのために4名を新規雇用し、大きく3つの事業①ICT利活用能力の向上、②地域ポータルサイト構築、③特産品開発に取り組んでいる。また、プロジェクトが終了する平成23年度末には新たな法人設立を含め継続できる体制づくりをしなければならないというミッションが与えられている。

●地域に入って3ヶ月は、事業説明に追われる

このプロジェクトを受注したのは今年の9月末であった。10月から人材の募集、面接を行い、元地場有力企業の経営企画室長や、元富士町古湯地区の公民館長、農業大学校出身で海外居住経験を持つ若手スタッフなど4名を雇った。

今回の事業には、「情報化」という言葉はついているが、ねらいは地域活性化であるため、ICT技術に加え、住民や事業主体間の調整能力が求められる。また今回の事業は新たにビジネスを起こすという最終目標もあるため、人材雇用については、自主性・モチベーションの高さも兼ね備えていることがポイントであった。面接でお会いした方は50名以上になったが、ICT技術だけでなく、コミュニケーション力にも長けた方々に集まって頂いた。

事務所は富士支所の3階を借りることができ、地域に入ったのは10月下旬であった。スタッフ4名のうち、地元古湯地区在住者は1名のみ。地域の方々にとっては、我々は完全によそ者である。また、地元にはまだプロジェクトの情報は伝わっていなかったため、町の方々から出るのは「何ばすつと?」「この町で新しくビジネスば起こすのは難しかよ」といった言葉であった。

そこで、最初に始めたことは、まずは顔を知ってもらう、事業のことを知ってもらう活動である。自治会や温泉旅館組合、JA、森林組合等の町内の様々な会合に出させてもらうとともに、30カ所以上の事業所に対してプロジェクトの説明と同時にヒアリングを行った。ヒアリングには、県の担当者にも同行してもらった。担当者の方は地元から様々な意見が寄せられ、胃が痛い思いもされたと思う。しかし、頻りに地域に足を運んでもらったことで、県の思いが伝わり、地元からの信頼を得ることができたと感じている。これと並行して、全戸へのアンケートによる問題や地元のニーズ把握、町内の統計の整理、町内の各団体、キーマン、人間関係の把握、歴史文化の勉強、イベントや行事への参加など、地域の情報収集と現状把握に努めた。

●より地元のニーズにあった事業へ

全戸アンケート調査の結果、「日常生活における安全・安心に関する情報が欲しい」ということが重要課題であった。また、ヒアリングでも、「以前よく見ていた町営のケーブルテレビが合併で放映中止になり、地域情報が埋もれてしまった」といった意見も多く聞かれた。そこで、当初のプロジェクト企画をもとに、より町の実情にあった形に修正を行った。以下、3つの事業の進捗を簡単に紹介する。



初期パソコン講座の平均年齢は65才。

① ICT利活用能力の向上（ICTをもっと身近に感じてもらうための取り組み）

富士町は、平成22年4月まで、主要公共施設を除きブロードバンドが整備されていないという状況であった。昔ながらのダイヤルアップ接続であったため、使いづらく、高齢化も進んでいることもあり、インターネット接続率は37%と県平均の45%より低かった。しかし、平成22年4月からブロードバンドが利用可能になったため、町民の方々が自ら地域資源を発信するチャンスや、地区外の子どもや孫とコミュニケーションを取ることにも可能になった。環境が整えば、インターネットを利用したい人も増えることが予想されるため、NPOシニアネット佐賀の協力のもと、インターネットやパソコンの基本的な使い方を学ぶ講座を5回シリーズ（延べ20日）で実施した。また、NTTドコモと連携し、携帯電話の安全利活用講座や、ブログ講座も開催した。

講座の参加者は平均年齢65才、最高齢82才、元気な高齢者の方々に多数の参加をいただいた。講座の御礼に、一升瓶いっぱいの柚子胡椒を頂戴したり、地元の方々と交流する大変良い機会になった。この他、日田観光協会事務局長を務める佐藤真一氏を講師に招き、店舗や旅館経営者向けのマーケティング講座を実施した。この講座では、地域資源の中で自分が魅力的だと思うものをワークショップ形式で出し合い、これを福岡都市圏住民向けのアンケートによって、認知度・関心・来訪意向を調べた。その結果の分析、今後の取り組みなどを4回にわたってこのマーケティング検討した。



富士町情報化シンポジウムには、70名以上の参加があった。

ここで出された取り組みは、今年度本格的に事業化する予定である。

また、韓国や国内の地域情報化の成功事例を紹介し、地域情報化の気運を高めることをねらったシンポジウムも開催した。こういった町内での活動は、地元到我々の活動を理解してもらう非常に重要な場であり、信頼を得る一助になったと感じている。

②地域ポータルサイト構築：地域に密着したサイト構成へ

町民アンケート結果をうけ、富士の情報発信の窓口となるポータルサイトは、観光客向けのページ「富士町のおもてなし」と町民向けのページ「ふじねっと」という2段構えの構成とした。

「富士町のおもてなし」には、町内の観光スポットの紹介、町民向けページには災害・犯罪などの緊急情報も掲載される。また、インターネットを利用してこれまでの人間関係が維持され、補完できるような役割を果たしたいという思いから、町民のブログコーナーやツイッターなどを取り入れた。



観光客向けのページ「富士町のおもてなし」



町民向けのページ「ふじねっと」

③特産品開発：既存の調査結果を特産品開発に取り入れた

富士町には、棚田米、レタス、ホウレンソウ、山菜など素晴らしい食材と、これを活かした料理がある。そこで、これらの資源を使った特産品を開発し、それを目当てに町内に来てもらいたい、できれば通販でも買ってもらいたいと考えていた。何を開発するかと考えていたところ、以前、佐賀観光協会のアンケートをお手伝いした際に、古湯・熊の川温泉は、全国と比較して「朝食の評価が低い」という結果が出ていたことを思い出した。

そのことについて、九州じゃらんの佐賀エリア担当者と話をしたところ、温泉旅館組合と協力して朝食メニュー開発を行うことになった。具体的には、富士町の棚田米（これは本当に美味しい）をもっと食べてもらうために、9軒の旅館と共同で「ご飯にあう朝食メニュー」として卵かけご飯やとろろご飯などを試作開発し、じゃらんの誌面やホームページにおいてPRを行った。温泉利用客へのアンケートは毎年行っているため、評価がどう推移するのか、楽しみなどところである。

●地域資源を活かした事業化支援のノウハウを積みたい

このプロジェクトがここまで到達することができているのは、「地元が必要としているサービスは何か」を第一に考え、事業の組み替えを行ったこと、佐賀県からの様々なサポートがあったこと、町内の様々な場に出し人的ネットワークを築いたことなど、いくつかの要



温泉旅館組合青年部、九州じゃらん、ふじねつとが共同で旅館の朝食メニューを開発



朝食メニューの一品。旅館大和屋さんの卵かけご飯は、三瀬鶏の地卵「小野寺さん家の卵」に、こだわりの醤油をかけていただきます。

因があげられる。中でも、最も大きかったのは、地元支所、本庁の支援を得られたことだと思う。合併により「支所」になったとはいえ、地域住民の信頼は大きく、支所抜きには物事は進まない。支所、特に支所長から「プロジェクトは、町として全面的にバックアップしていく」というありがたいお言葉をいただいてから、道が開けた様に物事が進み出した。

今年の5月からは、町内の自治会、各種団体、NPO、行政からなる「富士町の振興を考える会」という協議会が立ち上がり、その事務局も務めさせてもらっている。今後は、協議会の支援のもと、地域資源を活用した観光商品の企画や活性化のアイデアを出し、町の方々と連携しながら実現していきたい。

「地方にできることは地方で」という大きな流れの中で、国から地方への補助金や公共工事削減、地方交付税の見直しといった動きが進むとともに新たな企業誘致は望むべくもない。これからの地方にとっては、如何に「内からの創出・発信」をしていくかが重要であり、「地域資源を活用したビジネスの立ち上げ」のニーズは多い。地域に密着した事業化支援型シンクタンク、NPOの存在意義が増していると感じる。

中山間地ではどこでもいえると思うが、資源は限られている。だがその一つひとつをよく見ると、素晴らしいものがたくさんある。また、地域に住む人達も素晴らしい人がたくさんいる。それらの資源ををどう共有し、協力体制を築きながら新たな魅力を作っていくか、これからのプロジェクトの本番である。

(はら けいすけ)

過疎集落の安心・安定の暮らしを維持していくためには、 何をしていけばよいのか？

—八女市上陽町上横山地区をモデルに考える—

山田 龍雄

昨年度の国土交通省のモデル事業「過疎地域における安心・安定の暮らし維持事業」。八女市が応募し、採択を受けたその委託機関である（NPO）グラウンドワーク福岡の事務局長である大谷さんより、調査・計画のお手伝いを依頼された。

グラウンドワーク福岡は、イギリスを発祥とするグラウンドワークの活動をモデルとしている。住民・企業・行政をはじめ、会員による環境改善・環境教育・福祉啓発・国際交流などの地域社会づくりの活動をしている団体である。平成19年には八女市上陽町の「ほたと石橋の館」他4施設の指定管理者団体となり、八女市上陽町にも活動の場を広げている。このような活動をきっかけにして、上陽町の中山間地域で、現在、過疎化が著しい上横山地区をモデル地域として調査・計画づくりの提案が採択された。

調査の主な方法は、対象地区の全世帯へのアンケート調査、地元住民・職員を入れたワークショップ、地区からの移住した人へのヒアリング調査等をもとに実態を把握し、ワークショップを通じて、実現可能なプロジェクトを模索した。このプロジェクトの一つにあげられた「地域ブランドの焼酎づくり」の報告は、前回のよかネット98号に掲載している。

今回は、この調査から垣間見られる過疎地域



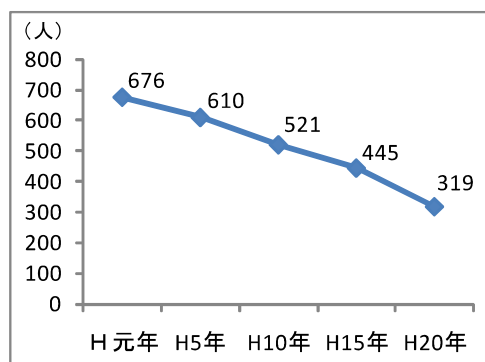
八女市上陽町の位置

の実態と、暮らしを維持していくための課題について報告したい。

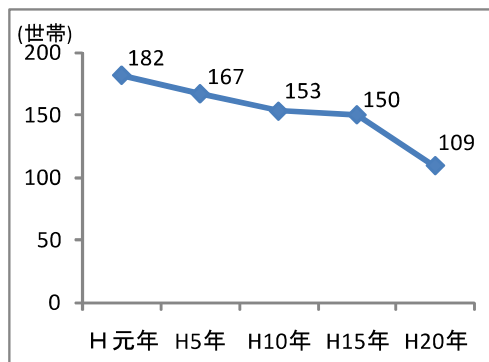
●豊かな山里を抱えた上横山地区

上横山地区には5つの集落があり、平成元年～20年の人口、世帯数の推移をみると、人口は5割強減、世帯数は4割減といった典型的な過疎地域である。高齢化率は51%、2人に1人が65歳以上の地域であり、70%を超えている集落も2箇所ある。将来、子供や親類、知人が戻ってくるか、都市住民が移住してくるなど、地域の担い手が増えなければ、地域の存続が危ぶまれているところである。

八女市上陽町のさらに山間部というと山奥で遠い印象であるが、福岡から車で約1時間20分で行くことができる。福岡から九州自動車道を経由し、上陽町の市街地まで約60分、それ



20年間で半数以下となった上横山地区の人口
資料 市住民基本台帳調べ



ここ5年間の減少が著しい世帯数
資料 市住民基本台帳調べ

集落別高齢化率
(平成 20 年)

	H20 年
八重谷	75.0%
三川	51.0%
納又	41.9%
田代	43.4%
古賀	70.4%
平均	51.1%

資料 市住民基本台帳調べ

から 15 ～ 20 分ほど山間部に入り込むと到着する。

上横山地区の最も山間部にある集落の納又(のうまた)地区には、段々畑を利用した茶畑、竹林、田圃など豊かな山里の風景が広がっている。この納又地区で、5月中旬に「春の山菜を採っての料理大会」に参加させていただいた。地元の世話人に付いていき、筍掘り、ワラビ採りなどを楽しませていただいた。特に地区会長直伝の山ウド料理の仕込みづくりは初めての経験で、山ウドの天ぷらの仕込みは皮を丁寧にむき、水にさらし、その皮を適当な大きさに結んでいくのであるが、楽しく、得した気分を味わった。春ののどかな日差しを浴びながら、農作業や料理作りをしていると、山里の豊かさを感じることができた1日であった。

10年ほど前に、宮崎県椎葉村で焼き畑農業をしながら民宿経営している椎葉クニ子さんに山里の暮らしを聞いたところ、「山里では、飢えたことがないのですよ」と言われたことを思い出した。納又地区でも椎葉村と同じように山の暮らしの懐の深さを改めて感じた。

●地域での不安、心配なことは？

上横山地区の暮らしや問題を探るため、アンケートを実施し、8割以上の回答をいただいた。「この地域で暮らしていく上で不安、心配なことは何ですか？」という問いに対して、「まさに

出るまでに狭い道路が多く、事故が心配」が約78%と最も高く、「空き家・空き地が多くなっている」(約48%)、「高齢化して祭りや行事の維持ができない」(約32%)、「地区内の商店がなくなると近くで買い物ができなくなる」(約28%)、「急に病気になったとき、救急車がすぐに来てくれるか心配だ」などの回答を得た。

車社会である現在では、道路は不可欠であるが、全てを広い道路にする必要はない。幅員が狭く、カーブが急で見通しの悪い箇所は少し離合できる程度に広げるとか、道路を広げなくてもお互いの通行を感知し、ブザーをならすような仕掛けがあれば解決できる場所は多い。

しかし、「地域の行事の維持」「買い物」「病院」「教育」の問題は、人のサポートや地域のシステムを変えないと解決できない、より深刻なことと感じられた。

特にバスで八女の中心市街地まで通院している人は、片道で1時間30分ぐらいかかるらしく、1日仕事である。

買い物や病院通いの問題解決には、公共交通の便を良くすることがあるが、簡単なことではない。将来的には、外に出かけるのが難しい高齢者のためのIT(情報技術)による見守り、遠隔診断や街なかのスーパー等に注文し、まとめて配達するような仕組みづくりを考えていく必要がある。子どもたちの「教育」の面ではインターネットによる遠隔授業など、都市部との教育環境の差を薄めていくことも重要である。道路や交通サービスと同様に、IT環境の整備は過疎地域において不可欠なものと思う。現在、山間部の公共交通サービスでは、デマンドバス

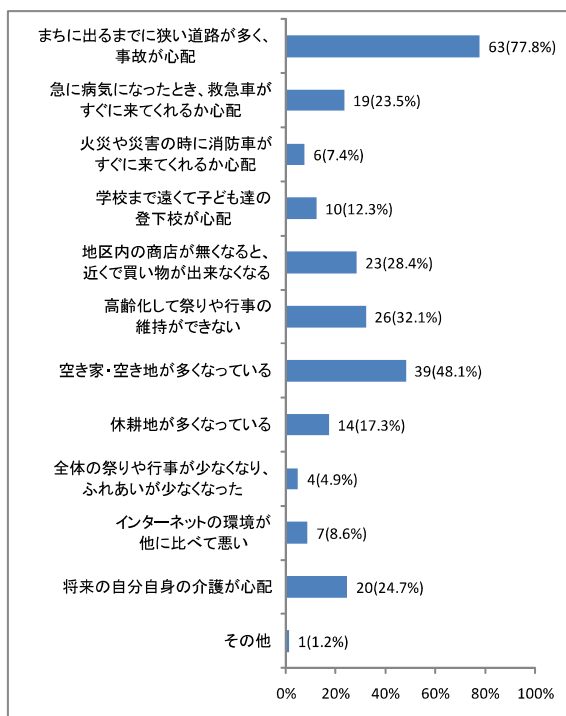


少し時季はずれの筍掘り体験



地区会長直伝の山ウドの天ぷら

図 この地域で暮らしていく上で不安、心配なこと
(平成 21 年度アンケート調査結果)



など新たなシステムの導入が考えられている。

●子どもと同居していない世帯のうち、月1回以上様子見にくる世帯は約5割

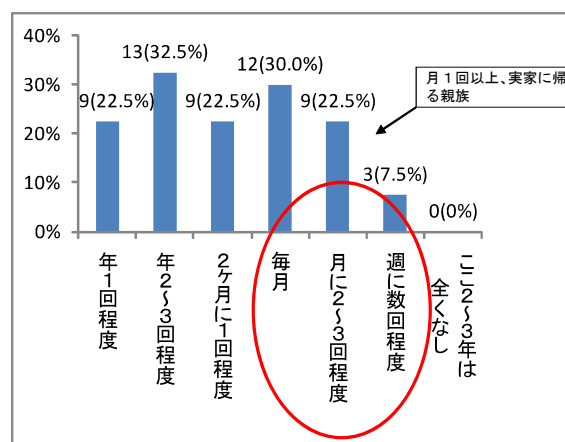
回答をいただいた94世帯のうち、子どもと同居していない世帯は49世帯の約半数であり、このうち、子供たちが月1回以上帰ってくる世帯は24世帯(約51%)あった。つまり、高齢で1人又は夫婦で暮らしている世帯の様子見に来る家族がいるのは、約半分程度であり、これらの世帯は、今のところ“暮らしの安心度は高い”と考えられる。

しかしながら、今は田舎に親が居住しているから、子どもたちが様子見に訪れているのであり、親がいなくなり実家に帰る理由がなくなったときに、子どもたちがどのような対応をするかによって過疎化の進行具合が決まってくる。

●今の暮らしと明日の暮らしを考えた取り組みが必要

過疎地域での暮らしを維持していくためには、今、居住している人たちが暮らしやすい道路、交通、情報などのハード整備と福祉環境を整備することが大切である。これらのインフラは、将来的に、暮らしづくりを続けられる基盤につながっていくものである。

図 実家に帰ってくる頻度
(平成 21 年度：アンケート調査結果)



また、長期的にみて地区外の人との交流づくりと産業づくりを進めていく必要がある。徐々に空き家・空き地及び耕作放棄地が増えていく中で、交流から定住の流れをつくっていかねばならない。少しでも定住する人(週末居住でも構わない)を増やしていくためには、地区とのつながりをつくる必要があるのではないだろうか。

一方、八女市や上陽町一帯で、新たな所得となる稼げる産業づくりを行い、ゆくゆくは働き場所を増やしていくことも必要だろう。

このような問題意識のもと、この調査で実施したワークショップであげられたプロジェクトが「地域ブランドの焼酎づくり」と「空き家体験ツアー」であった。

地域ブランドの焼酎づくりでは、利益の一部を地域の「豊かさ基金」として積立て、地域の環境整備や暮らしの維持活動の資金として役立てればと思っている。

また、グラウンドワーク福岡では、奥八女地域の資源を活用した加工品づくりにも挑戦している。これらの多面的な活動が実を結び、過疎地域の新たな暮らしづくりが機能することを期待したい。

(やまだ たつお)

第18回よかネットパーティー報告 寺山 香

●今年の「食」と「縁」

「人もうけ」を目的とした、恒例のよかネットパーティーを今年も開きました。今年の参加者は約60人と、例年より若干少なかったのですが、その分、所員一同が参加者の方々とお話をすることができ、いつもは食べることでできない料理も味わうことができました。

参加者の方々に一品を持ち寄ってもらい、今年も各地の様々な料理やお酒が集まりました。

「伊佐鹿のピリ辛ソーセージ風」や「いのししハム」など、珍しいものを持ってきていただきました。好評だったのが、佐賀市富士町の「杉山コシヒカリ」でした。当日、会場で炊いておにぎりにして頂いたのですが、皆さんから美味しいと高評価をいただいていたようでした。中には、おにぎりに「あぶり山河みそ」(熊本・古湯)をつけて食べていたり、有明の新海苔を巻いたり、その他にも京都から送ってきたたくあんと一緒に食べられている人もいました。皆さん自分好みにアレンジをして楽しんで食べられていたことが印象に残っています。

お酒は、焼酎は勿論、日本酒・どぶろくやワインなど様々な種類のものを持ってきて頂き、特に日本酒は各地の地酒が集まりました。また、ワインも人気で、数が多かったために台所に保管していたはずのワインがいつの間にか空いている！？という事態が起こったりもしました。



今年も各地の「うまいもの」が集まりました。

●今年の企画はいかがだったでしょうか

今年は何かいつもと違うことをしようということで、考えた企画として、「利き焼酎」・「よかネットもうすぐ100号記念紙」・「ビデオ撮影」などを行いました。

「利き焼酎」は、5種類の焼酎の銘柄を当ててもらおうというものでした。全問正解者も出るのではないかとの予想とは裏腹に、最高成績は3問正解という結果に。ほっとするやら残念やら…複雑な心境でした。「普段飲み慣れているはずなのになあ…」と首を傾げる方も多く、普段の飲み方と違っていると意外と当たらないようです。本来、利き酒は飲むのではなく、香りと舌で種類を当てるものらしいのですが、焼酎はどうなのでしょう。なかなかわからないものなのかなと思いながらも私自身、普段の飲み方を考えてしまいました。

今回はパーティーの間、ビデオ撮影も行いました。当初はパーティーの状況を生中継で動画配信サイトに上げようと考えていましたが、事前に皆さんの了解も得ていなかった等の問題によりやむなく中止に…。かわりに、今回のパーティーの様子はよかネットのホームページで配信しようと考えています。残念ながら来られなかった方や、遠方で来られないという方にも少しでも雰囲気伝われば良いなと思っています。来年も参加して良かったと思って頂けるようなパーティーになるように知恵を振り絞りたいと思います。

●にわかに来る？かもしれない

今年もっとも盛り上がったのは、「博多にわか」でした。政治ネタのにわかはもちろん、参



富士町のお米でおにぎりを握っていただきました。食通の方々にも好評だったみたいです。



会場において設置された本の販売ブース。今月号のbooksでも紹介しています。

加者からお題を募ったにわかも大盛況。難しいお題にも即興で難なく応えている様子には笑いながらも感心しきりでした。巷では「謎かけ」が流行っていたりもするので…ひょっとしたら来るんじゃないでしょうか、にわかブーム。と一人考えてみたりもします。

●年々客層が変化している

元々よかネットパーティーは、仕事帰りの人が多かったそうです。よかネットパーティーを始めた頃は、事務所の会議室で、夕方から始めていました。それを土曜日の昼からに変えたため、仕事帰りではなく、「人もうけ」をしたいという人の集まりという状況になっています。そんな要望にお応えするためにも、新しい人との出会いの機会をもっと増やす必要があるようです。

今回はビデオ撮影を含め、学生さんなど多くの人達にお手伝いをして頂きました。来年はさまざまな人に声をおかけして、新しいネットワークを作れる場にしていきたいと考えています。
(てらやま かおり)

**津屋崎の市民参加による
まちづくりの取り組み**
—J SURP 福岡支部
第2回まちづくり研究会 報告—

本田 正明

事務局のお手伝いをしている日本都市計画家協会福岡支部の総会が6月12日に行われました。

平成20年12月13日の支部設立から約1年半、「都市計画研究会」や「まちづくり研究会」

などを開催してきましたが、特に昨年7月に九州大学や都市計画学会九州支部と合同で開催した第3回都市計画研究会「戦後日本の都市計画伝説 高山英華」は、大変好評でした。今期も、前期同様の取り組みを継続するとともに、地域のニーズに沿った研究テーマ開発や、「公共の色彩を考える会」や「地域マネジメント学会」など他団体との連携も積極的に行っていこうと考えています。

総会後には、第2回まちづくり研究会として、日本都市計画家協会賞の福岡支部賞を受賞した、「海とまちなみの会」の吉村勝利氏に「津屋崎の市民参加によるまちづくりの取り組み」を講演していただいたので、その内容を報告します。

そもそも「海とまちなみの会」が生まれたきっかけは、平成18年に福津市が公募した「津屋崎千軒考え隊」のメンバーが、ワークショップの後、このまま解散をするのはもったいないと、活動を続けてきたことがきっかけだそうです。

地域の良さを発信しようと、季刊紙「津屋崎新聞」を発行したり、津屋崎千軒民俗館「藍の家」で、町並みなどに関する市民対象公開講座を行っています。また、津屋崎の歴史と文化、自然を学び伝えるために、ボランティアガイド養成講座なども行っており、現在14人のガイドが生まれています。平成22年5月末までで、計27回711人をガイドしているそうです。ガイドの際に使われる「津屋崎千軒そうっこう」(※そうっこうは津屋崎の方言で「歩き回る」の意)というパンフレットをいただいたのですが、藍染めのイメージが活かされたセンスの良いものでした。マップのデザインも地元の女性が担当されたそうです。

その他にも「津屋崎まちづくりフェア」では、電線がない時代の家より高い祇園山笠のパネル展示会を行ったり、東大の西村幸夫先生を招いた景観まちづくりの講演会を開催したり、藍染めのバンダナづくりや鏝絵(こてえ：左官が壁を塗るこてで絵を描く、漆喰装飾。)や卯建(うだつ)、塩田施設の塩倉庫などの建築遺産の発掘、外国人交流バスツアーなど、実に多様な取



講演会の様子。右端が吉村氏。手にしているのが「津屋崎そうっこう」

り組みを行っています。109人いるメンバーに女性が多いことが、推進力になっていると吉村さんは語っていました。

ただ、メンバーに高齢者が多いこともあり、病気になったり、連れ合いが認知症になるなどの理由で、ボランティアガイドが8人減るなど課題もあるそうです。会の運営も助成金などに頼っているので、自立的な運営ができるよう収益事業も行っていきたくて言われていました。

その後の懇親会では、ぜひまちづくりの現場を見に行こうという話で盛り上がりましたので、7月24日（土）に、津屋崎のまちづくり見学ツアーを行おうと企画しております。興味ある方、参加したいという方は、よかネット寺山・本田までご連絡ください。

（ほんだ まさあき）

6月16日、社内会議室において、事務所の

地域ゼミ エコ市民団体「耳納ねっと！」

－眠っているもの、
リフォームしてみませんか？－

寺山 香

レイアウトを変更して初めての地域ゼミを開催しました。タイトルは「耳納ねっと！－再生工房の取り組み－」。講師として元よかネットの社員である小田好一さんにお話して頂きましたが、小田さん曰く「まさか自分が話す日が来るとは…」とのこと。何だか感慨深げでした。

「耳納ねっと」とは、うきは市の耳納クリンステーションの附属施設「再生工房」におい

て、エコ活動に取り組む市民団体のことです。主な活動としては、いらなくなった布や廃材のリフォーム教室やフリーマーケット、エコをテーマにした料理教室や作品展など、様々なエコ活動を市民と一緒に取り組んでいます。

●作品のレベルの高さにびっくり

リフォーム教室は基本的に市民が持ち寄った布などをリサイクルして作品を作るのですが、完成された作品を見てその想像以上のかかわしにびっくり。ネクタイで作ったポーチや博多織のバックなど、そのレベルの高さには驚きの連続でした。

中でも私が一番気になったのが、消防団の服をリサイクルしたバッグです。この団服、うきは市が合併する前に使われていたもので、今となってはかなり珍しいものだそうです。そのため、一部がネットのほうに流れてしまったりもしたそうですが、残っているものをバックとしてリサイクルすることができたそうです。消防団の服のため、しっかりした織りでつくられているうえ、前面にある「浮羽」の文字がまたなんとも粋でかっこいい。そういえばうちにも団服があったなあ…と思い出しました。

服のリフォーム以外にも、浴衣やタオルを使った布ぞうりや端切れでつくるパッチワーク、古布や古い着物を使った裂き織り（布を細く裂いて、それを横糸として新しい布を作る手法）、一閑張り（竹箆などの道具に和紙を貼り、その上から柿渋や漆などを塗ったもの）教室などが行なわれています。

リフォーム教室と並んで主婦に人気なのが3



消防団の団服で作ったバッグ。見た目も鮮やかでセンスが光ります。

Rクッキング教室です。

エコということで、①普段は捨ててしまうような食材を使う②普段は買っているものを自分で作ってみる③耳納の伝統料理を作るという3つをテーマに開催されています。講師は地元の方ですが、レパトリーを増やすため外部講師を呼ぶなど、かなり本格的な料理教室となっているようです。

●生まれ変わって増すアンティークの魅力

廃材を使った木工教室では、古いタンスの修理やリサイクルを行なっているそうです。教室だけでなく、廃材を引き取って修理・販売も行っています。アンティーク家具は粗大ごみとして捨てられていることが多く、また使わないので引き取って欲しいという要望も多いため、「何かに使えるだろう」と何でも引き取っているのが、様々なものが倉庫に眠っています。なかには捨てられていた牛車…なんて珍品もあるようですが、移動式展示棚として使えないかなど、色々考えているそうです。

長持ちで作ったベンチや桐箆笥を使った棚など、アンティークの良さを残しつつ新たに生まれ変わった家具は、新しい物にはない魅力にあふれていました。昨年10月にはアクロス福岡で展示会を開催。1週間に5千人もの参加者が訪れ、展示品への関心の高さが感じられたそうです。

●手軽な値段に市内からの参加者も急増

リフォームした家具は入札、または抽選で販売されるそうですが、どれぐらいで売れるのかとお聞きしたところ、5000円でも売れないこと



ネクタイを使って作ったポシェット。一見するとネクタイに見えない出来栄です。

もあるとか。「安すぎる」という声も上がりましたが、なかなか買うというところまで行くのは難しいようです。なかにはかなり高い値段で落札される家具もあるようで、アンティーク家具の可能性の高さを感じました。

また、リフォーム・料理教室は1回300円ですが、年会費1000円を払って賛助会員になれば、1回の受講料が200円で教室に通うことができます。「もっと高くしてもいいのでは？」という意見もでしたが、「福岡ならそれでいいかもしれませんが、うきはではそうはいきません。あと200～300円上げただけで参加者がいなくなってしまう可能性もあるのでなかなか上げることができません」とのこと。参加希望者は多く、1回20人の参加者の中にはうきはの人だけでなく福岡や久留米から来る人もいます。ちなみにリフォーム教室の作品ですが、今は未だ事情があって販売していないらしく、作品展示のみだそうです。しかし、運営費が厳しくなるなか、今後は一つの収入源としても考える必要があるようです。エコ製品がさらに広がるきっかけとなるかもしれません。

●故きを温ねて新しきをつくる！

このほかにも、エコ活動の一環として、生ごみの堆肥化のための講習会や、フリーマーケットなどの活動も盛況で、耳納ねっと！といえばフリーマーケットといわれるほどにまでなっているそうです。

世の中ではエコやリサイクルが叫ばれていますが、それを実践できているのは果たしてどれぐらいいるのでしょうか。今回のゼミの中で流



長持ちを使って作ったベンチ。完成には3日～1週間ほどかかります。

されたVTRのなかで、祖父の服を新しくリフォームした女性の、「おじいちゃんに守られている気がする」というコメントがありました。古いもののよさは、時を重ねた素材の良さであると同時に、その人にしか感じられない大切な思い出にこそあるのだろうなということを感じています。今から暑くなる時期、衣替えついでに自分の服を整理して新しい使い道を考えてみようかな…と考えながらもその難しさに頭を悩ませそうです。(てらやま かおり)

皆様から寄せられた「よかネット」へのご意見、近況などの紹介

■今、厚労省が最も力を入れている地域密着型介護サービスの一つである「小規模多機能型居宅介護（事業所）」の研究をしています。各事業所が地域の支援を得るには、各事業所のサービス圏域を的確に設定すべきことが少しわかってきました。福岡市、大牟田市の調査を終え、熊本市の調査の準備中です。

(福岡市 上和田 茂)

■新幹線が開業すると、玉名から福岡は遠くなります。1時間に2本あった特急が、新幹線では1本に減らされるからです。地方にとっては良いことばかりではありません。

(玉名市 由富 章子)

■①昨年11月の民主党の「候補者公募」に応募し、書類選考に受かり、「地方自治体の選挙候補者」として人材登録できました。みなさんチャレンジしてみてもは！！

②ここ7年間の「大空襲」に関する研究活動の中で、現在「全国空襲被害者救済のための法制化（超党派）」活動に勤しんでおります。ご身内等に空襲で被害に遭われた方がおられたら、私あてにご連絡下さい。資料等をお送り致します。(柳川市 平川 硬一)

■「誰もが皆、先に進みたがる。しかし、今は後戻りするほうが、ずっと賢いと私は思う。」ジョナス・メカス『どこにもないところからの手紙』、ホントだな。滋賀県の山奥にある「ミホミュージアム」に行ってきました。陶淵明の

「桃花源記」をテーマにした美術館。80%が木の中にかくれているのもいい。「カエリナンイザ／デンエン、マサニアレナントス／ナンゾ、カエラザル」。これも、どこにもないところからの手紙のもう一通でした。

(春日井市 津端 修一)

■定年退職後の米づくりも5年目を迎えました。無農薬、無化学肥料でコシヒカリをつくり、家族、知人に食べてもらっています。

(熊本県南阿蘇村 高島 一純)

■かつてに「日本列島改造」があった。その政策を実行してから35年、国土がよみがえったことは否定できないと思う。日本列島再改造をぶち上げる時勢ではなかろうか。つまり列島再活用である。国際基地、食料生産、環境、道州制、少子高齢化を折り込んだ列島再生である。

(福岡県糟屋郡 福田 昂明)

■佐賀の(NPO)高遊外壳茶翁顕彰会は、H16から煎茶道を庶民に広めた「高遊外壳茶翁」が佐賀出身であり、顕彰と情報発信を行ってききましたが、本年6月26日に市の協力のもと新たな情報発信センターがオープンします。「肥前通仙亭」(佐賀市松原4丁目)是非、取材して頂ければと思います。

(東京都 内田 純夫)

■仕事は九工大教授、産学連携交流部門長で変わりませんが、この4月から国の3機関(九州経済産業局、産業技術総合研究所、中小企業基盤整備機構)が設立した、九州ブロックの産学交流組織の「産学官交流研究会博多セミナー(通称：二金会)」の会長に就任致しました。

毎月第2金曜日16時より、福岡市博多区博多祇園ビル1Fセミナー室(商工会議所ビルの向かい側のビル)で誰でも参加可能なセミナー(無料)をやっています。

(北九州市 佐伯 心高)

■毎号楽しく拝読しています。オールカラーとなって観るのも楽しくなりました。感謝。“糸乗節”は老いてますます好調ですね。雪丸さんの食べ物地域興し談義は美味しそうです。原さんの韓国レポートで、九州は最も近い外国との連携にも強みを持ちそうですね。

デジタル情報もよいけど、こういう紙情報も捨てられませんね。ついでに言えば全部手書き原稿をそのままプリントすると貴重なものになりますね。

(横浜市 伊達 美徳)

■観光協会理事、まちづくりグループ等を通して、うきはのまちおこしをお手伝いしています。「食」を使ったまちおこしに興味があり、よかネットの食や観光の記事に興味深く拝見させていただいています。いつかうきはで実践できたらと思っています。

(うきは市 小田 好一)

■いつも「よかネット」を楽しみにしています。私事ですが、定年まであと1年弱となりました。毎年1回の山歩きは154回目を数えました。庭の野菜づくりも10年目に入ります。花づくりも少しづつ広がっています。

(北九州市 丸山野 美次)

■この10年で115から174へ。本町の生活保護受給率が下がるどころか、上昇するばかりだ。この数値を恥ずべきか、誇るべきか、置かれている立場で異なろう。一概に論ずる事は出来ないが、政治に携わる者としては手をこまねいていられない。何とかしないと、日本全体が生活保護受給地帯に。その時には生活保護も呼び方が変わっているかもしれないが。

(田川市 さくらい 英夫)

■私自身は仕事が忙しく、車を持っていないので農業等と関わることは難しいのですが棚田オーナーなどには興味もっています。妹が先月子供と田植え体験を前原でさせていただき、とても楽しかったといっています。どんな形であれ、農林水産業の後継者が育てて欲しいと思いました。

(福岡市 田中 まさ美)

■この春、鳥取観光庁を退職し、4月1日から「鰻絵なまこ壁文化協議会」の事務局長をやり始めました。鳥取の鰻絵なまこ壁は大変見事です。今年の11月13日と14日には、「全国・鰻絵なまこ壁サミット in 鳥取 2010」を倉敷市で行います。2日目には鳥取の魅力を巡るツアーなどもあります。伝統的な生活風景を残す鳥取に、皆様、是非ともお越し下さい。

(鳥取市 宮本 孝二郎)

■大阪は、空港問題でもめています。関西国際

空港は、地元の請願でつくられたものを、知る人が少なくなったせいか、解決策が見えません。需要の高い伊丹の廃止より、需要の低い関空を、沖縄の米軍基地の受け皿にしてはと思うのですが？

(川西市 高橋 久栄)

■構想策定から6年、雲仙古湯地区の街なみ環境整備事業は、事業に着手され、20年度に7棟、21年度には21棟のファザード改修が終了、今年度からは、温泉地獄からの水路移設整備が始まり、湯の里としての落ちついた街なみが甦り始めました。

(小郡市 大渡 剛弘)

■最近幣誌「日経グローバル」で大学と地域の共生活動を取材しています。東北公益文科大学は日本海の孤島「飛島」の島づくり、明治大学は世界遺産の地「熊野」で外国人向けガイド育成に取り組むなど、活動は皆ユニークで真剣。地域おこしの第三極として大学に注目です。

(東京都 菅野 由一)

■近時評として、長々しき経済低迷と未曾有の経済危機を嘆き、ここ数年の持論である日銀取扱による証券取引場操作・バブル化を通じた我国経済社会の一挙立てなおし策(デフレも人口減少も文化活動衰退も)を本欄に記した1年前を読み返し、何も始まっておらず、溜息。このままでは本当に駄目になってしまう!所で加齢とともに変化してきた嗜好に気づく。計画整備より乱開発、自然より人造、現実より虚構、社会性より無関心、情愛。生命より孤独・逃避…これが終焉・解脱か。対異性に始まる興味は変遷の末、言わず動かずの石に辿りつくとも聞いた。平成22年諦観の還暦。

(東京都 佐藤 正憲)

■退職後3年経ちました。経済的にはスリムになりましたが、ココロは豊かになってきました。

(高槻市 中川 要之助)

オチコボレの戯言・その7

落ちこぼれ時代における、
オチコボレ人間不足が、日本の
落ちこぼれからの脱却を妨げている

糸乗 貞喜

●オチコボレ論を書くきっかけは「アキバ通り魔事件」

25才の加藤智大という派遣労働者だった青年が、2008年の6月8日、日曜の歩行者天国でにぎわっていたアキハバラで、死者7人負傷者10人の殺傷事件を起こした。

その時のテレビ・新聞などの報道や、識者とされる人たちの意見が「かわいそうだ！かわいそうだ！、社会が悪い・国が悪い！」の一边倒で、現実を見据えた問題提起には全くお目にかからなかった。

この丁度七年前の同じ日に、大阪府池田市で「付属池田小事件（2001.6.8）、1年1人、2年7人死亡、児童13人教師2人傷害」が起こっている。この事件の七年後にアキバ通り魔事件が起こったのだ。七年間、何の対策の行われなかった。

いや、対策は取られた。

年末には「派遣切りを救え」という掛け声で、日比谷公園で炊き出しが行われた。そして多くの人が「良心」の満足を得て、いい気分になった。しかしそれ以後も「誰でもよかった」と言って無差別殺人をする事件が絶えない。マスコミも同じ態度で騒いでいるだけだ。

私のいいたいことは、第一回に書いた「現代はオチコボレが増加しやすい社会構造になっている」のだから、「オチコボレとしてちゃんと生きてやるぞ!!」という行き方を取ってほしいということである。

また現代社会は、「何とか有名大学を出て、一生高賃金を保証されたい」という生き方は、すでにムリになっているし、今後は一層成り立たなくなる。「オチコボレの方が自由があつていい、新しい生き方を開発するぞ!!」という気になったほうが楽しい。

オチコボレは“個性”の源泉である。「みんなはどうしているか。その尻尾にすがりつくにはどうすればいいか」では、心豊かな人生は生まれない。個性は、落ちこぼれること、脇道を歩くことから始まる。

●今や「新卒切り」（派遣切り、内定切りに続いて）まで来た、とテレビがいう

先日テレビを見ていたら次のようなことをやっていた。「君はオチコボレや」と上司に言われた。「他のみんなは成果を出しているやろ。なぜ出来ないか反省文を書け」と、書かされた。そして九日目、「きみもシンドイやろ。これ以上いてもムリや」と言ってクビになった。

これを放送していた番組の評論家・タレントが、「これは、派遣切り内定切りより酷い、新卒切りだ」「ケシカラン・ケシカラン」の大合唱をした。しかし、営業職に向かない人もいる。「これ以上いても無理な職種」にしがみついても明日はない。私は会社の人々が「辞めなさい」という方が優しいと思う。ヒョットして採用試験のやり方が十分でなかったかも知れないが、あり得ることなのである。

●日本人の意識は、1980年頃から受け身・依存主義に変わった

あまり楽しい話ではないが、私が世の中の流れを強く感じたエピソードを書く。

大阪の頃（1980年頃）、長いこと勤めてくれた女性が「子供が生まれる頃には辞めたいので、私の仕事を引き継ぐ人を採用してほしい」といつてきた。まだ四ヶ月ほどのゆとりがあった。そこへ、アルバイトに来ていた女性が「私は近く結婚するのですが、その仕事に採用してくれないませんか」といつてきた。「小さい会社だから、そんなに多くの人を雇うわけにはいかない。本当にやる気があるか」と確かめて、正式に給料を払って、跡継ぎになるための受け継ぎ教育をやらせることにした。

前任の人に仕事の教育係を頼んで、後10日ぐらいで引き継ぎという時、「やっぱり、結婚後は家にいたいので、就職は辞めたい」といつてきた。わたしは「あ、そう、分かった」とだけいつた。前任の女性は臨月寸前のおなかを抱

えながら「大丈夫ですか」と、心配顔で聞いてきた。「気にするな、予定通り辞めていいよ。君はいい子を産め」という返事をした。

しかし私の頭は次の対策に移っていた。小さい会社では余分な人件費は掛けられない。みんなの給料が減ることになるからだ。

2-3日後に、件の女の子が「話がある」といつてきた。「私が仕事の受け継ぎをするといっていたので、急に取り消したら困るでしょうから、やっぱり勤めたい」といつてきた。私は「別に気にしなくてもいいよ、何とかするのがボクの仕事だから」と断った。彼女は、会社は次の担当を用意していないので、私が喜んで受け入れると思っていたのかも知れない。しかし、私は断った。

すぐ翌日ぐらいに、また面会を求めてきた。「私は就職辞めようと思ったけど、母親は“そんな理解のある就職先はあまりない。頼んで勤めさせてもらえ”といつたのでお願いします」といつてきた。それに対して、「自分の考えはそう変えるものではない。気にしなくてもいいよ」といつたが、「やめようと思ったのは私で、母親は勤めさせてもらえ、といっているんですよ。なぜ聞いてくれないんですか」と食い下がってきた。

ところが、彼女は私の同僚の役員や一般の所員に「自分を雇わないのは不当だ」と訴えたので、引き留めなかった私が「横暴な経営者だ」といつて糾弾されることになった。

その後の顛末は、男の役員や労組組合員の一部がその声を取り次いで申し入れてきた。しかし、他の女性所員は、無言の内に私を支持しているように感じられた。「女性でも同じ仕事をするなら、甘えだけではダメ」という陰の声が聞こえたのである。

●所員の採用面接を、「会社を採用してもらおう」側に立って、仕事の説明を丹念に続けた

90年頃だったか、九州で三人の女性アシスタントを採用して、失敗したことがある。彼女たちのやる気が心配だったので、「アシスタントといつても、ある程度任せる会社だから、自分で考えなきゃならんよ」といつて、仕事内容を

説明しながら、何度も念を押した。相手のいうことはとりあえず信じるタイプなので、「ハイやります」といつてを信じた。しかし全く通じていなかった。

彼女たちは「会社というところは、遊ぶような気分でちゃらちゃらしていたら金をくれるところ」くらいの教育しか受けていなかったのだ。一人の子は、何かやらせると“なぜこんな事までしなきゃならんのだ”と不快感をあらわにし、一年待たずに辞め、残りも2-3年で辞めてしまったが、退職後半年くらいたった頃、最後まで残った子から「他の会社に行ってみて、やっとな働きやすい職場だったことが分かった」といつて声が聞こえてきた。

それにつけても思い出すのは、岩切祐子という人だ。有料老人ホームを作って、多くの人から支持されている方だが、その本の中に「女ははじめからリストラされている」といつ項目がある。だからはじめから新しい仕事を作つていつた人だ。

●「えゝでねーか」といつ行き方がよい

1991年に制作された山田洋次の映画「息子」の中のセリフである。

このあらすじは、妻を亡くした老父が山間の農家に住んでおり、タバコなどを作っている。そこへ、老母の一周忌ということで、長男と長女のそれぞれの家族、そしてまだ就職先も決まっていない次男が帰ってくる。最近、近隣の老人がプロパンガス事故で死んだといつ話も出て、誰がどこで老父を引き取るかといつことが問題になる。

有力大学を出て一流の勤め先をもち、家族の中の出世頭である長男は、千葉の方の高層マンションの11階の家を買い、老父を引き取るための六畳の部屋を用意している。

戦友会のために上京した老父を呼んで、マンションの一室にテレビをあてがい2-3日暮らししてみる。しかし老父は、何もすることのない暮らしにはおさまれない。次男の様子を見た上で山の村に帰るといつて出てしまう。

一方、出来が悪いとみられている次男は、やっとな鉄工所に就職し、鉄筋を運ぶ小型トラックの

助手として働き、運搬先の聾啞の娘を見そめる。それを見た周囲の大人たちが「彼は娘が聾啞であることに気がついていない」といって、こそそとウワサをする。

「えゝでねーか」という言葉は、娘が聾啞者であっても気にしないという決意を持つときに、自分に対して発する言葉だ。そして彼と彼女は、お互いにファクシミリを持って心を通わせあう。

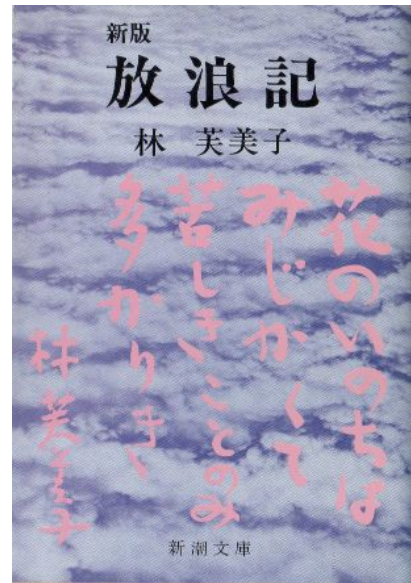
そこへ、次男のことを心配していた老父が来る。次男の住まいは木造アパートで、そこを尋ねた老父に、その恋人が来て食事を作ってくれたりする。老父にとって、唯一心残りであった次男に恋人がいるということで、一挙に心が豊かになって、少し酒を飲んだだけで「お富さん」を歌い出してしまふ。三人の心が通う時間である。

そして翌日、父は息子と電気店街へ出かけ、ファクシミリを買って岩手へ帰っていく。雪に埋もれた山里の家の中へ、電気店の包装紙に包まれたファクシミリを持って入っていくところがラストシーンである。雪に埋もれた山里の父と、安っぽいアパートの次男と恋人の三者間での、暖かいファクシミリ交流が暗示されている。山田洋次は、世間が認める立派なマンションの暮らしよりも、落ちこぼれた古いアパートに住んでいても、心を通わすことが肝心だといっている。

●「放浪記」を読むと、現代は貧乏を看板にした「たかり根性」の時代だと思う

昔の貧乏暮らしが気になってきたので、「放浪記（林芙美子）」を読み返してみた。1922（大正11）年から1926年までの日記を元に書かれたものだが、その間に1923.9月の関東大震災がある。

この小説は「放浪」とはいつているが、実際は全くゆとりのない「仕事探しと食べ物確保のための放浪記」である。もちろん、東京、関西、徳島、尾道などの放浪は続いているが、縦糸は仕事探しである。その気分が出ているところを引用すると、「貧乏な父や母にはすがるわけにもゆかないし、と云って転々と働いたところで、



「新版 放浪記」

著者 林 芙美子 新潮文庫

月に本が一二冊買えるきりだ。……三畳の部屋を借りて最小限度の生活はしても貯えもかぼそくなってしまう。こんな生活方針（くらしむき）がたたなく真っ暗闇になると、本当に泥棒にでも入りたくなってくる。だが目が近いのでいっぺんにつかまってしまう事を思うと……」となっている。なんか不謹慎ではあるが「目が近いので」には笑ってしまう。

私は1936年生まれなので、この頃のことはもちろん知らない。しかし子供の頃には、私の生まれた田舎にも、母親に二人の子供がついて回る乞食がいた。私自身が母親に叱られる言葉の中で、最も恐ろしい言葉が「乞食に連れて行ってもらうぞ」だった。

現在の私たちは、その時代の人たちの働き（蓄積された労働）の上に立っている。団塊の世代以降の人たちは、戦前や大正時代のことを知らない。知的な認識能力の基準が違いすぎるように思う。

1970年代になって、ある程度気楽にビールが飲めるようになったころ、「こんなに日本人が豊かになったのは、誰が働いてくれたんやろ」と、同年配の人間同士はいつていた。昔のことを思い出すと、自分の働きではビールが飲める身分ではないと思っていた。この感覚については、団塊世代以降の人たちとは共有できないと

思っている。

●系列内人間と無宿人と新産業

1972～3年頃、大阪の千里中央に「大阪事務所」をつくり、楽しく仕事をしていた。なかなか便利なところで、土曜日は午前中のミーティングが終わると、すぐ側の大丸か阪急で総菜とご飯を買って、缶ビール付きの昼食を楽しんでいた。

大阪万博後の不況に向かう頃で、産業界の「系列化」が問題になっていた。そこへ朝日新聞の社会面のトップに1/4ぐらいのスペースで、「就職は系列内で」という記事が載った。大企業が系列内をまとめて、就職斡旋会社を作ったという内容である。一週間後に、また朝日が「結婚も同系列で」という記事を、同じ紙面の同じ場所に書いた。

この話が土曜日の缶ビールランチの話題にならないはずはない。

「結婚も系列内の斡旋会社が世話をすることなら、はずれ人間はどうなるんやろ」

「結婚して子供が大きくなるとな、系列に入っている人間は、またいい会社に入れて、男前と別嬪さんが結婚するんや」

「はずれ人間はどうなるんや」

「小説に無宿人というのが出てくるやろ、我々みたいな小企業はな、無宿人の人足寄せ場に集まった奴らみたいなもんや。合戦の助っ人に雇われて行くと、敵味方に分かれることがあってもね、まあわしらは無宿人同士の身内なんやから、お互いケガをさせないようにしようね」

新しい産業というものは、無宿人の寄り集まりから生まれる。

私たちの「まちづくり・都市計画」プランナーやコンサルタントも、東京の「環境開発センター」が最初で、2番手が京都の「アルパック」だったようだ。

その5年後くらいに、商社系やゼネコン系子会社のコンサルが生まれていった。大企業や系列企業でも、新品種開発は無宿人的な部門が行う。メインルートの部門は失敗させることが出来ないで、いつでも切り離せる子会社などを作って行うのである。

●水木しげるという、“超特級オチコボレ”の漫画家が流行っている

既存のワクグミの中のトップが、東大法学部を出て大蔵省の役人になり、事務次官になることとされている。私の記憶では、戦争前には陸軍大将になることだった。私の経験でいうと、右目が悪いということが分かったのは、小学2年生のはじめだった。親は心配して病院に連れて行ったりしたが、私は「もうこれでは陸軍大将になれないのだな」と思っていた。既存のワクグミのトップというのは、みんなが目指すものでなければならぬので、さしたる特徴はない。一方オチコボレはというと、既存の規範からはずれることなので、そのトップは多種多様になる。

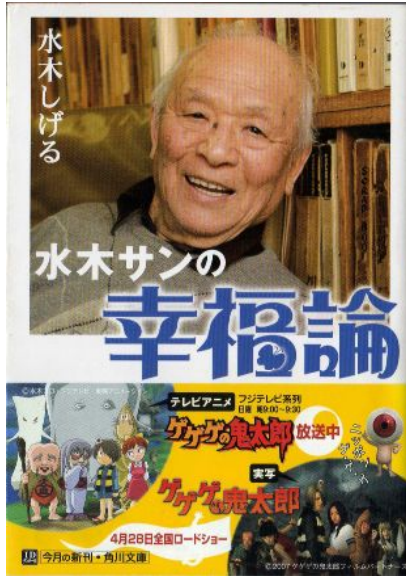
水木しげるは妖怪観察学会の会長をしているので(会員は1人)、超特級のオチコボレである。この際、一人で学会を作れば特級になれるかというところではない。彼の場合は、妖怪の妄想をし、物語に表し、絵に描くなど、万人が認める超特級である。

水木しげるには「幸福の七カ条」というのがある。これが「オチコボレの心得」とうけ止めてもいい内容である。

幸福の七カ条

- 第一条 成功や栄誉や勝ち負けを目的に、ことを行ってはいけない
- 第二条 しないではいられないことをし続けなさい
- 第三条 他人との比較ではない、あくまで自分の楽しさを追求すべし
- 第四条 好きの力を信じる
- 第五条 才能と収入は別、努力は人を裏切ると心得よ
- 第六条 なまけ者になりなさい
- 第七条 目に見えない世界を信じる

「努力は人を裏切ると心得よ」などという言葉は、面目躍如たるものがある。他人の評価をアテに、何かをしようとするのは立派なオチコボレとは言えない、と彼はいつているのである。今「ゲゲゲの女房」というテレビドラマが放映されている。奥さんである武良布枝さんの書かれた「ゲゲゲの女房」を原案にしたドラマであ



「水木サンの幸福論」

著者 水木 しげる 角川文庫

る。その中でも相当の貧乏暮らしぶりが出てくるが、本の方がもっとさりりとしていて、かつリアルである。たまたま書店で見つけた「the寂聴8号」のなかの「鼎談 寂聴・水木しげる・武良布枝、終わりよければすべてよし」も読んだ。自然体の水木夫妻の話が面白い。

誰でも囲い込みの中の安全地帯にいる方が気が楽ではある。しかしそれは囲いの中の「しきたり・ルール」に従い、気を遣っていなければならない。この文の中で九日目にクビになった人は、おそらく「囲いの中の安全地帯ルール」に合わせられなかったのだと思う。私のように三等オチコボレにならざるを得ないのかも知れない。「囲いの中」の最下層にしがみつより、ココロ豊かに暮らせるだろう。水木が言うように「努力は人を裏切る」かも知れない。しかし納得した努力なら、それでいいのではないか。

【終わりに】面白くもないことを、ぐだぐだ書いて、悪かったと思っている。ここで終わりにして、後は私のホームページで続けたい。気分が乗ったら【オチコボレ流 =otikoboreryu】を覗いてみていただきたい。追々、昔書いたものやしゃべったものも載せてみたいと思っている。

(いとりのり さだよし)

九州最南端の南大隅町の地域資源を活用した
雇用創出プロジェクトシンポジウム報告
「みんなでどう売る、どう作る！」
(地域雇用創造推進事業)

雪丸 久徳

生まれ故郷の南大隅町（旧佐多町と旧根占町）とご縁があり、昨年より地域雇用創造推進事業のコーディネートをさせてもらっている。九州の最南端にあって、人口は約9,500人、高齢化率は約43%と鹿児島県内で最も高く、109自治会のうち、限界集落36.7%、直前限界集落19.3%、準限界集落21.1%、合わせて77%の集落の存続が危ぶまれている。「仕事がない」、「若い人は都会に出ていく」、「活気が無い」という状況が、人口減少と高齢化とともに急速に進行してきた。地域にある豊かな自然と一次産品（山・海）を活かして、地域に仕事をつくる＝雇用の場を増やすことや、人材の確保、人材育成を行うことは、地域の維持・存続をかけた重要な課題となっている。そこで、厚生労働省の地域雇用創造推進事業の事業採択を受けて「最南端の地域資源を活用した雇用創出プロジェクト」に取り組むことになった。

以下、3月13日にその一環として行われたシンポジウムの基調講演「つくる・売るの実践・ごっくん馬路村の村づくり」（馬路村農業協同組合の東谷望史氏）の報告である。

〈子供の頃からの身近な素材ゆずに生き残りをかけた〉

・高校の時に一度村を出て高知市で2年間働いたが、どうしても生まれ育った村で働きたいとの思いから、昭和48年に馬路村に帰り、農協に入った。当時の馬路村は林業中心。国有林事業の恩恵で村が成り立っていた。しかし、石油ショック・高度成長を経て、これまでの農協の仕事だけでは定年まで生活できないと思い、営農指導員になった。しかし、農地が少ない馬路村において、営農指導をして専業農家を育てて作物を導入して…、という夢は描けなかった。

- ・子供の頃から地域で栽培されていた「ゆず」、これをどうにか売れるようにしなければ生き残れないと思った。

〈通過点でない地域の場合、行きたいと思わせるイメージづくりと情報発信がカギ〉

- ・馬路村は、1,000m級の山に囲まれ農地に恵まれていない。すり鉢の底のような村である。
- ・南大隅町と馬路村の似ている点は、どちらも通過点でないことである。情報を発信し、行きたいと思わせるまちづくり、イメージを売らないとお客さんは来ない。
- ・お客さんをどうやって呼び込むかということを考え、「ゆずの風」新聞やパンフレットを作って積極的に村の情報を出したところ、お客さんが遊びに来てくれるようになった。

〈ものを売る→村のファンをつくる。ものづくりから地域づくりに考えがシフトした〉

- ・村に遊びに来た人に聞くと、「ゆっくりできた、村人と話げできた」など、村人にとっては普通のことに都会の人は喜んでることがわかった。
- ・旅のスタイルが変わる中、自然以外は何もない馬路村だったが、自信をもって情報を出したことで、お客さんや視察者が増え始めた。
- ・村に来た人をファンにするために、村をどうつくるか、ものづくりから地域づくりに考えがシフトしていった。

〈ものづくりを継続させる視点：最後は自分たちでつくる〉

- ・「ゆずという一つの素材でこんなにも沢山の商品がつけれるものか」というぐらい考えた。



「ゆず」カラーにあふれている、個性豊かな馬路村のパンフレット

- ・商品を長く続けるためにしなければ、技術や知識が自分たちのものにならない。また、効率よく、お客さんに安く提供することもできる。

〈地域内で足の引っ張り合いをしない。外に売る〉

- ・ゆずの加工所が出来て最初の担当になった。その頃ゆずは売れていなかったが、売り方が悪いと思っていた。幼い頃からゆずを食べて育ったが、何歳になっても飽きがこない。高知県の食文化は、売り方次第では日本に広められる可能性があるという夢を持って挑戦しはじめた。
- ・産地同士で足の引っ張り合いはよくないと思い、県内の20の産地との競争はやめ、東京・大阪の百貨店に売りにいくスタイルを目指した。

〈既成概念にとらわれず、生産～販売の儲かる仕組みづくりで雇用に〉

- ・農協は、受託販売という形式をとっていたが、商品が多くなるにつれて手続きが複雑になったので、買い取り販売に変更し、利益は組合員に特別配当、出資配当という形にした。
- ・働く場が減少する中、雇用が増え始めると役場も関心を示した。この事業がなければ、人口は1000人をきっていたと思う。
- ・注目されはじめたため、採用は、村外者ばかりだとクレームもでるのでバランス良く採用することにしている。

〈お客さんは同じ手では感動しない、あの手この手でお客さんに感動を。〉

- ・情報発信は、春、夏、秋の年3回、村の情報や商品案内を送っている。冊子タイプでつくったこともあったが、お客さんが選びにくいと思い、机に広げて家族でわいわい言いながら選べるような一枚ものを作成した。毎回どうやって開かせるかに力を注いでいる。
- ・年1～2回オリジナルの広報が届く「村外村民制度」を役場が運営していて、3,000～4,000人の登録がある。村のファンを増やさない村に遊びに来ないし、村の商品も売れない。

〈県外に売りこみに行くときは、後の通販客に引っぱり込むことを意識した〉

・高知県内で販売すると他の産地と競争になるので、年間約80日県外販売に行ったが、さすがに疲れてきた。一緒に行っていた周辺の農協はやめていったが、代わりに何ができるかを考えたらやめられなかった。新たに都市部のお客さんを通販に引っぱり込むことをネタにした。

〈デザイナーと出会って、都会をおっかけない村独自のスタイルに〉

・村の価値があがる、評価される時代がきたと思った頃、デザイナーと出会った。彼らは、「短針は長針をいくらおいかけても追いつけないが、1周して後ろから長針がきたときに、その時代に乗り移ろう」と、わかったような、わからないようなことを言ったが意気投合した。

・南大隅町は、観光においても、ものづくりにおいても、都会（まち）を追いかけない独自のスタイルのものをつくっていくべきではないかと思う。

〈加工工程の効率化がカギ〉

・加工品は、工程を効率よくしていくのがポイント。ゆずを置くだけで皮を剥いてくれる

機械を見つけ、安定してつくれるようになった。

・利益は少ないが、大手メーカーは参入してこない、産地だからこそできるものだが、素材を瓶詰めしただけの商品は、付加価値がつきにくい。

〈ディテールにこだわる。〉

・お客さんが村に来るようになり、生産が間に合わなくなり、工場を大きくする必要があった。約20年、利益は組合員に配当していくなかで、内部留保が20億円ほどできていた。

・これを元手に、思い描いていた「ゆずの森の構想」に着手した。黒川温泉の後藤さんに来て話も聞き、お客さんを最初に出迎える部分には雑木を植えるなど、美しい景観づくりにこだわった。

・木と漆喰の建物を計画していたが、漆喰部分は贅沢品なので補助金カットということになった。しかし、「ものづくりを売ること完成させたいと思えば、ここで折れると中途半端になる」と言って最終的にはみんなの理解を頂いた。

・30年近くかかったが、挑戦を続けていなければ、今はなかったと思う。

（ゆきまる ひさのり）

近 況

奈良の纏向（まきむく）遺跡へいく

「纏向遺跡」と聞いて分かる人は、けっこうな古代史ファンと思われる。邪馬台国の畿内説



纏向遺跡付近を走る万葉まほろば線

最大の比定地だといえ、新聞に出ていた記憶を思い出す人が若干増えるかもしれない。それでも一般的にあまり知られた地名ではないようだ。2010年は、平城京遷都1300年ということで、奈良市は第一次大極殿のある平城京跡を中心に祭り騒ぎをしている。5月はよく関西に



迫力のある箸墓古墳

行っていたのだが、毎日どこかで「せんとくん」の顔を見た気がする。本当は、第一次大極殿や大遣唐使展もみたかったのだが、テーマパーク的なノリと人の多さが苦手なので、纏向遺跡であれば、意外と人が少ないだろうと思って出かけてみたのだった。ちょうどそのころ、纏向遺跡で発見された宮殿をめぐる、「邪馬台国は纏向遺跡で決まり」的な新聞記事が出ていたので、もしかしたら人が多いかもしれないと心配までしていたくらいだった。

●古代史で重要な遺跡が、人を呼べるとは限らない

纏向遺跡は、奈良駅から万葉まほろば線（桜井線）で、20分ほどいったところにある。列車は2両編成のワンマン列車。単線なので、30分に1便程度である。最寄り駅である巻向駅についたとき、降りたのは、私を含め5人程度だった。天気の良い5月の日曜日なのに、お客はほとんどいない。「纏向遺跡が邪馬台国ならば、経済効果が147億円」という推計もあるらしいが、現地をみて考えたのだろうかと思ってしまう。近くにコンビニも見当たらず、自販機がかろうじてある程度で、どこにお金が落ちるのかまったくイメージできないからだ。私は伊都国に住んでいるので、遺跡や古代史を通じた観光PRのヒントがつかめればと期待していたのだが、その期待は到着と同時にあっさりと消えてしまった。古代史でいくら重要な遺跡だからといって、観光につながるものでもないという現実を教えてもらった。

●サービス精神の希薄なまち

そもそも、あまり旅行者に親切ではないのは、案内板の少なさからも伝わってくる。卑弥呼の墓と比定されている箸墓古墳は、駅からも10分程度と近く、全長270mもある前方後円墳なので迷うことはないが、解説のひとつもついてない。日本書紀に記述のある倭迹迹日百襲姫命（やまととひももそひめのみこと）の墓として、宮内庁が管理しており、立ち入りも禁止されているのは残念だった。

●オススメはホケノ古墳

周囲をぐるりと一周しながら、伊都国や一支

国、奴国の王墓などは、地形を利用したものがほとんどなのに、箸墓古墳は、ほとんど地形と無関係に人工的につくられたお墓のように感じた。「大坂山から墓までの長い間に人民をならばせて、手送りにして石を運ばせた」という崇神紀の記述もまんざらではなさそうである。

纏向遺跡について一番よかったのは、箸墓古墳ではなく、実はホケノ古墳だった。この古墳は、丘陵地に形成されていて、周囲にはのどかな小川も流れていて雰囲気が良い。（なぜかここだけ、説明板もあったりする。）箸墓古墳よりも古いということがわかりつつあるらしいのだが、歴史的な重要性がわからなければ、立ち入りも自由らしい。古墳の上に登ると、眺望も開けて見はらしがいい。現代でも見晴らしがいいところに、墓地団地ができるくらいだから、古代にも同じような発想があったのではなかろうかと妄想した次第である。

（本田 正明）

総 3年間で62人のUターン者

～正応寺地区の地域・むらづくり～

賛否両論いろいろあると思うが、これからの地域づくり、むらづくりのキーワードとして、

1. 「地域のことは地域で」→「地域のことを他所（よそ）のヒト・チエ・カネで（※1）」
2. 「カリスマリーダーが必要」→「※1のカリスママネージャー育成で」
3. 「行政・税金・補助に依存する」→「共感者・ヒトに頼る」「行政・税金・補助に頼らない」（業界全体？）
4. 「やりっぱなしで情報を出さない」→「やったことを出来るだけ人に早く知らせる、情報を出し共有する」

こういったことを考えていたところ、5月に、宮崎県都城市に足を運ぶ機会があり、「正応寺地区」（人口約519人、世帯約162戸）のむらづくりを知った。

正応寺地区は、都城市街地から南へ車で10分ほどにあり、盆地越しに霧島連山高千穂峰を望める農村風景が綺麗な地区（都城市安久町）である。その地区の活動組織「NPO法人正応寺ごんだの会」理事長の石井和郎さんに話を聞

くことができた。この会と地区のむらづくりは以下のようなことである。「ごんだ」とは、かつてこの地区で栽培が盛んに行われた小型渋柿「ごんだ」に由来している。

- ・平成6年頃まで、集落道路は鬱蒼とした樹木や竹林で覆われ、50年間まったく進歩がない、暗いイメージの集落になっていた。
- ・平成7年から自治公民館（館長石井さん）を中心に「村づくり活動の目標」をたてて、明るいむらづくり活動を開始し、屋敷木の伐採や遊歩道を整備する活動に地区住民で取り組み始めた。しかし、自治公民館組織には活性化の機能がないと取り組みに限界を感じていた。
- ・過疎・高齢化が進行する中、マンパワー、チエ、技術の面で限界が来たと思い、こうした取り組みを地区外の人からの協力も得て将来継続できるように、自治公民館組織からNPO法人を発足させた。
- ・「NPO法人正応寺ごんだの会」は、総務部、まちづくり部、集落営農部、企画部、グリーンツーリズム部、物産開発販売部で構成されている。

＜NPOの主な活動内容＞

- 景観を良くすると人がよってくる。「やっさごんだ「安久の柿」の見える風景」復元
 - 地域の小中学生と一緒に食農、地域を学ぶ活動
 - ホームページやマスコミをつかって正応寺の活動をPR
 - ・耕作放棄による荒廃地を解消するため、NPOでは不可能な農地の利用権設定を補完するために別会社として法人を設立（平成19年）。
 - ・農産加工品の開発販売の体制が整う。など
- このようなNPOでの各種活動の結果、平成18～20年度の3年間にIターン15世帯58人、Uターン2世帯4人となり、空き家等が相当解消されたそうである。

自治力アップ、持続可能な地域づくり、むらづくりのたくさんのヒントがあるように思う。次号で詳しく報告したい。

（雪丸 久徳）

●広島市で「ひろしま夢プラザ」を見学し、呉冷麺を食する

●ひろしま夢プラザは中高年女性で盛況

6月はじめに、ソフトバンクホークス狂（教）の所員たちと一緒に広島カープとの交流戦応援のため、新広島球場に出かけた。

当日、12時前には市内に到着したのであるが、試合開始まで2時間近くあった。そこで、私だけ時間があれば見てみたいと思っていた広島の本町通り商店街にある「市町村情報センター夢プラザ」を訪れた。この施設は広島県商工連合会が、広島県内各地の新鮮な野菜、加工品、工芸品等をPR及び販売するアンテナショップとして平成10年にオープンしたものである。

土曜日の昼時であったためか、中高年の女性を中心にお店は盛況であった。ここには市町村の観光パンフやイベント情報、文化施設のチケット販売等のコーナー等があり、市町村の情報センターとしての役割も担っている。

また、田舎暮らしに関する相談コーナーもある。お店では各市町村から応募した商品を2週間程度、展示・販売する「イベントブース」が4箇所ほど設けられており、少しずつ展示・販売する品々が入れ替えられている。

平成16年には年間来店者が150万人を突破しており、広島市を訪れる人に定着しているようだ。

●呉冷麺はなかなかのもの、しかし、呉グルメマップには1店しか掲載されていないのは？

「昼飯は何にしようか」と本町通りから広島駅に向かって路地筋を歩いていると、間口1.5



中高年女性で賑わうひろしま夢プラザ（HPより）

間（3 m弱）、奥行き4間（7 m程度）程度の店に心魅かれた。店の表に「呉冷麺あり」という看板が置かれ、お客は満杯、約7割が女性客であった。さっそくカウンターに座り「表に書いてある“ご”冷麺ください。」と注文した途端、お店の大將らしき人が「“くれ”冷麺ですね。」と言われて、はじめて「広島県の呉」と「呉冷麺」が一致した。しかし、お店の名前を改めて確認すると「呉麵屋（ごめんや）」と書いてあり、私が音読みしたのも条件反射ともいえる。

呉冷麺は、最近、何度かTVで放映されたらしく、最近、人気が出ている麺料理らしいが、全く知らなかった。平麺のチャンポン麺に甘酸っぱいスープがかけられ、キュウリ、ゆで卵、海老、チャーシューがトッピングされていた。このスープのベースはたぶん鶏ガラであろうと思うが、これにいろいろなエキスが加わり、なんともいえない深みのあるスープとなっている。このスープにお店オリジナルの辛みエキスを適量加えると、さらに食欲をそそる。夏場はお好み焼きより、断然、この呉冷麺に限ると思った。福岡でも既に進出しているかもしれないので、ネット検索し、是非食べに行こうと思う。

ちなみに翌日は、呉の「大和ミュージアム」を堪能し、昼時にもう一度本場の呉冷麺を食べてみようと思いきや大和ミュージアムで手に入れた「呉グルメマップ」を見ると、なんと「呉冷麺発祥の店～珍来軒」しか案内されてなかったのには、驚いてしまった。これはまさに明太子の「下関」「福岡」関係に似ていると思った。

この珍来軒は駅から1 km近く離れており、また、帰る新幹線の時間も迫っていたので、本場の呉冷麺は諦め、広島駅ビル地下で普通の「ひろしまお好み焼き」で済ませてしまった。少々残念であったが、たぶん競争にさらされ、生き残っている広島市内の呉冷麺の方が美味しいのであろうと自分を納得させた次第である。

（山田 龍雄）

MAZDA Zoom-Zoom スタジアム広島に遠征に行きました

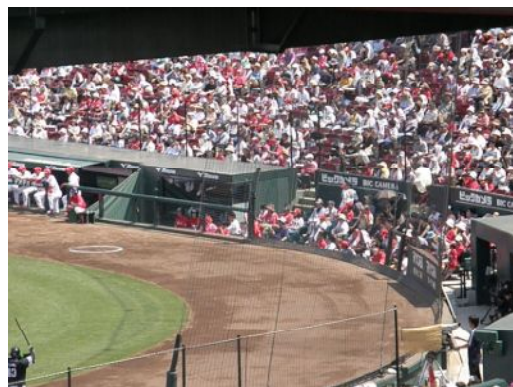
6月5日に広島対ソフトバンクの交流戦を見に広島に行ってきました。

思い立ったのが5月初め頃だったからでしょうか、3塁側（ホークス側）の指定席はほぼ売り切れで、内野自由席のチケットを買いました。試合開始は14時。開場は12時。自由席なので早めに行ったほうがいいたろうと、8時半に福岡を出発しました。せっかくなので広島に行くので名物お好み焼きも食べたいと思い、少しでも早く球場に入るために持ち帰りを買って行きました。球場に着いたのが12時45分。すでに内野自由の3塁側は満席。係の人に「1塁側の外野寄りなら少し空いているかも」と言われましたが、見たらカープファンばかり。その中でホークスを応援する根性も無いので、結局立ち見で応援する事にしました。しかも持ち込んだお好み焼きは、人が沢山通る階段の踊り場に座り込んで食べるはめに。親切なカープファンのおじさんが、下に敷く段ボールの切れ端をくれました。

MAZDA Zoom-Zoom スタジアム広島は昨年出来



ぐるっと一周できるコンコース。満席で立ち見の人がたくさん。左上が2階のビジターパフォーマンス席という熱心に応援する人達の席。

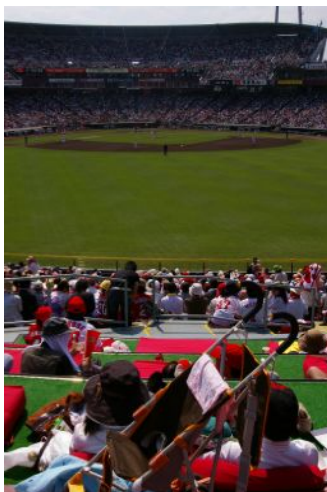


ベンチよりも、ホームベース寄りにある「ピクカメラシート正面砂かぶり」

た新しい球場です。1階席後方のコンコースは球場を一周できるようになっており、どこからでも立ち見ができます。

面白い席がいくつもあり、中でも興味をそそる席が2つありました。

一つは、ベンチよりも、ホームベース寄りにある「ビックカメラシート正面砂かぶり」。ヤフードームではこの位置からは観戦できないの



バックスクリーン横から見たグラウンド。正面2階席が座り損ねた内野自由席。手前は寝ソベリア。



バーベキューができる席には食品の広告と「焼肉が食べたいのお〜」と書いてある、こういうセンスも面白い



スタジアム内の食べ物と、グッズに書いてあるひと言

で、とても気に入りました。もう一つは、寝そべりながら観れる「寝ソベリア」。この日は天気が良く、暑そうでしたが、屋外でまったりできる感じがよさそうです。

他にもバーベキューができる席、テラス席と、屋外を活かした楽しそうな席がたくさんありました。何よりも観客席のフェンスが低いので、選手がとても近くに感じられるのが好印象です。

今回もう一つ楽しみにしていた事がありました。カープグッズとスタジアム限定の食べ物です。カープグッズは、グッズ自体や包装紙などに書いてあるひと言が、とても良いセンスです。トイレットペーパーの注意書きには「カープが勝利を収めた瞬間のスタンドへの投げ込みはご遠慮ください」や、2本セットの耳かきは「先発と抑えてお耳をスイープ」など、思わず笑いがでてお土産に買いたくなりました。

スタジアム限定の食べ物も、ミニヘルメットに入れたアイスや、カープにちなんだ「C」の形のドーナツ、赤い鯛焼き、赤いかき氷など、そのセンスの良さに惹かれてしまいます。

こういうセンスは、購買意欲をくすぐる重要なポイントだと思いました。

それにしても、立ちっぱなしはきつかったのので、次に行く時は、指定席は確保せねばと思いました。

(佐伯 明日香)

八女市上陽町 地域ブランド焼酎づくり 動き出す

前回の「よかネット」でご紹介した八女市上陽町での焼酎づくりが、5月19日に実行委員会準備会を開催し、実行委員会が立ち上がりました。

委員長には熊本学園大学の豊田先生(日本焼酎学会会長)、副委員長に久留米大学の駄田井先生、地元でGW福岡の会員の倉員(くらかず)さんが選出されました。

さらに6月9日には、焼酎づくりの製造委託を予定している黒木町にある酒造メーカーの社長さんから委託料の件や焼酎づくりのポイントなどを聞くことができました。

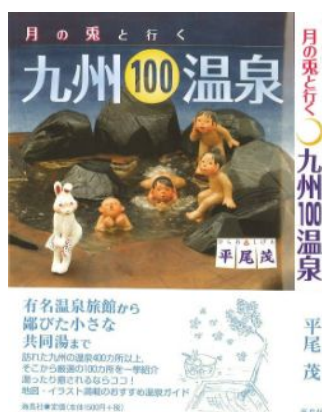
社長さんの話では、買い取った芋と黒木町の

藤の花から採取した酵母を使用し、地域カラーを出したいとこのこと。また、山間部のイモ植えではイノシシが必ず狙ってくるので、十分な柵づくりを行って行くことが大事であるとの指摘を受けました。イノシシの子が芋畑の中に入ると、親イノシシは電気柵でも引きちぎって畑の中に入ってくるそうです。

6月20日(日曜)には畝づくり、6月25日(金曜)には苗植えを行いました。「よかネット99号」が届くころには、イノシシ除けの柵作りを行っている時期かもしれません。

これから収穫までは雑草取りなどの作業が出てきます。手伝っても良いと思われる方は、(株)よかネット(山田、原)までご連絡ください。

(山田 龍雄)



「月の兎と行く
九州100温泉」
著者 平尾 茂
海鳥社

●本を片手に温泉へ

「月の兎と行く 九州100温泉」が出版された。著者の平尾さんとは、かれこれ15年以上前からの付き合いである。コンサルタントという仕事では、毎年多くの人たちといろいろな出会いがあり、仕事が終われば、お会いすることも無くなるということもある。当社の場合は、むしろ仕事が終わると、仕事相手の人との付き合いが始まるということが多。(もちろん新たな仕事をさせていただくことも多い)

平尾さんには、佐賀の美味しいモノ、美味しいお酒をたくさん教えていただいた。ある時から、携帯メールに温泉の紹介や食べ物の紹介をもらうようになった。毎週のように、熊本、大分、長崎、山口など、様々な場所から、まさに現地

レポートのように写真付きのメールが届いていた。このメールは今も続けられているが、その400カ所以上の温泉地の中から、選ばれた現地情報が「九州100温泉」である。

是非、この本を片手に持って、現地を訪ねて読んでいただきたい。というのは、PRのための観光情報では無く、著者である平尾さん自身の「見て、感じて、思ったコト」が書かれているため、知らないところを案内してもらっているような気分にもなれる。また、おもしろいのは、温泉紹介の順番が、九州の歴史街道である長崎街道から始まり、豊前、豊後、日田往還、人吉、薩摩の6つの街道沿いに構成されていることである。温泉だけではなく、地元の食べ物、人柄に触れる旅にも便利である。

平尾さんとは、佐賀や福岡でもお酒をご一緒することがある。その時の酒の肴の一つが、温泉の話であり、お酒の話である。温泉だけでなく、日本酒に関してもその知識・情報にはいつも感心させられている。今度は是非とも日本酒の話を書いて欲しいと思っている。

「九州100温泉」は福岡、佐賀の書店に置いてあります。近くで入手できない場合、当社に連絡していただければ郵送致します。

タイトルにある「月の兎」というのは、長野市中野駅に置いてある土人形の名前で「持っている人と最愛の人と必ず巡り逢える」という言い伝えがあるそうです。平尾さんお気に入りの人形とのことで、詳しくは本をご覧ください。

(山辺 眞一)

新人紹介

2年前、大学2年のことですが、大学のインターンシップとして韓国のホテルで3ヶ月間働



けるというチャンスが巡ってきました。元々韓国に興味があった私は有無を言わずそれに飛びついて、親の了解もろくに得ないまま（反対されていたとは思いませんが）韓国へと向かいました。

仕事をしながらも、仲間と飲みに行く機会が多かったのですが、みんな本当によく食べる。そしてよく飲む。怒られているはずなのにいつの間にか一緒になって飲んでい…こんな光景がよく見られました。日本と同様に韓国でも「飲みニケーション」が減っているのはよく聞きました。私の行った場所はそんなことはなかったようです。さすがに回数が多すぎるかな？と思ったときもありましたが、結果的にうまくうち解けることができたのも食べ・飲みの影響が大きかったのかもしれないな、と今になって思います。

コミュニケーションをとるうえで大切なのはお互いの立場を知ること、その上で本気になって話す場を作るということだと思いますが、その中でもやはり「食」の占める役割は大きいな…と感じることができました。仕事とは関係ないことではありましたが、これも貴重な体験だったように感じます。

編集後記

学生の時、縁あってよかネットにアルバイトで通い始めてもうすぐ2年ほどになります。とうとうやって来たか…という気持ちで初めて編集を担当しました。今回書いた記事は3本ですが、もっとも苦勞した記事は「新人紹介」です。聞いたところ、誰もが自分で書く新人紹介には難儀したそうで…過去のよかネットの記事を読みながら皆の苦勞(?)が垣間見え、ようやくその気持ちがわかった次第です。(て)

2カ所の山間部の仕事が、同時進行しています。山間部とは言っても大都市に近いかどうかで、活性化の方法は全く違います。しかし、仲良くなるまでには、時間は同じようにかかるようです。(べ)

よかネットはやはり仕事柄「食」に関するこだわりは強いなと感じています。私も負けなような様々なところにアンテナを張り巡らしておかないと、と考えています。

余談ではありますが、韓国でのインターンシップから帰ってきてから3ヶ月後、体に異変が…というか現地で食べていた韓国料理が食べたくてたまらなくなってしまいました。

どうやら私は旅先での感じた味覚に感化されやすいらしく、実は今も3ヶ月前に行ったベトナム料理がもう食べたくてもう食べたくて…検索してみると市内に3件ほどめぼしいお店を見つけました。行く機会を虎視眈々と狙っている日々です。
(寺山 香)

機関誌「よかネット」1号～99号までをデータベース化しました！

季刊でお送りしております「よかネット」ですが、ネットでの閲覧を希望される方々の要望にお答えしまして、第1号から99号までの内容をPDF化し、よかネットホームページ上での公開を始めました！随時、文章検索機能の追加や動画配信等、内容を充実させていく予定です。「よかネット」で検索してご覧下さい。

機関誌よかネット バックナンバー

<http://www.yokanet.com/3.magazine/back.html>

よかネット No. 99 2010. 7

(編集・発行)

株式会社よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

株式会社地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 042-501-2531

名古屋事務所 TEL 052-202-1411

株式会社地域計画・名古屋
